

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集

平成10年度

東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ

(西都～清武)

1999

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集

平成10年度

東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ

(西都～清武)

1999

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局（現 九州支社）の依頼により、平成7年度から東九州自動車道建設工事予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。

本年度は、昨年から継続の上ノ原・迫内の両遺跡と大辻屋敷遺跡の合計3遺跡について調査を行いました。これをもちまして、清武～西都工事区間33遺跡のすべての調査を終了することとなりました。

本書は、平成10年度の3遺跡の発掘調査の概要を報告したものであります。

中でも、迫内遺跡においては、古墳時代の高塚古墳と横穴墓、中世の石塔群が集中して発見され、宮崎市西部地域のみならず、日向地方の歴史を考える上で重要な資料となりました。

発掘調査に際しましては、地元の方々をはじめ、作業に従事された方々、関係機関の各位に、ひとかたならぬご理解とご協力をいただきました。無事に一区間の調査を終了できましたのも、ひとえに皆様のお力添えの賜物でございます。ここに厚く御礼申し上げますとともに、本書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となり、広く活用されますことを期待します。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

例 言

- 1 本書は、平成10年度に宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社の依頼を受けて実施した、東九州自動車道（西都～清武間）建設事に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡のうち、調査終了後に字名を検討した結果、名称を変更した遺跡がある。該当する遺跡については、第1表に明記している。
- 3 本書に使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の5万分の1地図を基に作成し、各遺跡の周辺地形図は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所から提供されたものを基に作成した。
- 4 本書の執筆は各担当者が行い、本文目次に明記した。編集は、調査第一係 主任主事 戸高眞知子が行った。
- 5 平成10年度の発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 田中 守

事務担当 庶務係 係 長 児玉 和昭

主任主事 磯貝 政伸 主任主事 吉田 秀子

調査担当 調査第一係 係 長 面高 哲郎

(上ノ原遺跡) 主任主事 木本 剛

(大辻屋敷遺跡) 主任主事 福松 東一

主 事 橋本 英俊

主 事 日高 広人

(迫内遺跡) 主 査 倉永 英季

主 事 小山 博

主 事 橋本 英俊

(調査および遺物整理進行管理)

主 査 菅付 和樹

本文目次

第Ⅰ章 平成10年度の調査	(管付)	1
第1節 調査の経緯		1
第2節 調査の概要		1
第Ⅱ章 各遺跡の調査		6
第1節 上ノ原遺跡	(木本)	6
第2節 大辻屋敷遺跡	(福松)	10
第3節 迫内遺跡	(倉永・小山・橋本)	13

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1)	3
第2図 遺跡位置図(2)	4
第3図 遺跡位置図(3)	5
第4図 上ノ原遺跡 調査区および周辺地形図	6
第5図 上ノ原遺跡 基本土層図	6
第6図 上ノ原遺跡 22号礫群実測図	7
第7図 上ノ原遺跡 20号土坑実測図	7
第8図 上ノ原遺跡 24号土坑実測図および埋土断面状況	8
第9図 上ノ原遺跡 35号集石遺構 配石状況実測図	9
第10図 大辻屋敷遺跡 基本土層図	10
第11図 大辻屋敷遺跡 出土遺物分布図	11
第12図 大辻屋敷遺跡 土器出土状況実測図(1/20)	12
第13図 迫内遺跡 調査区および周辺地形図(1/2000)	13

表目次

第1表 東九州自動車道関係遺跡一覧表	2
--------------------	---

写真目次

写真1	遺物整理作業の様子（接合・実測作業）	
写真2	上ノ原遺跡 24号土坑掘り込み検出状況	8
写真3	上ノ原遺跡 7号炉穴群検出状況	9
写真4	大辻屋敷遺跡 調査区全景	10
写真5	大辻屋敷遺跡 土器出土状況（西から）	11
写真6	迫内遺跡 A区全景	14
写真7	迫内遺跡 A区 骨蔵器出土状況	15
写真8	迫内遺跡 A区 出土した板碑	15
写真9	迫内遺跡 B区 建物跡遠景	16
写真10	迫内遺跡 B区 磨崖板碑全景	16
写真11	迫内遺跡 D-1区 溝内遺物出土状況	17
写真12	迫内遺跡 D-2区 遺物出土状況	17
写真13	迫内遺跡 1号横穴墓（東から）	18
写真14	迫内遺跡 2号横穴墓（東から）	18



（接合作業）



（接合作業）



（実測作業）



（実測作業）

写真1 遺物整理作業の様子

第I章 平成10年度の調査概要

第1節 調査の経緯

宮崎県教育委員会では、平成7年度から日本道路公団の委託を受け、東九州自動車道清武～西都間の建設工事に伴い遺跡の発掘調査を実施している。平成10年度も同公団九州支社と県教育庁文化課が平成10年4月1日付けで契約を締結し、同日より平成11年3月31日までの期間で宮崎県埋蔵文化財センターが調査を実施することとなった。

本年度は、昨年度からの継続調査箇所である上/原遺跡と迫内遺跡及び新規調査箇所の大辻屋敷遺跡の3遺跡の発掘調査を行った。また、併せて平成7年度から現在までに調査を終了した遺跡のうち25遺跡については、発掘調査報告書原稿や図面の作成、遺物の整理作業等を実施した。

第2節 調査の概要

本年度調査した3遺跡のうち継続調査である上/原遺跡は、平成10年4月6日～6月11日の約2ヵ月間で残りの約1,700㎡の調査を終了した。調査の結果、旧石器時代の礫群1基をはじめ逆茂木痕のある陥凹状土坑5基を含む10基の土坑を検出した。なかでも始良・丹沢火山灰降灰以前と思われる土坑が1基確認されたことは貴重な発見となった。このほか、縄文時代早期では、前平式～桑ノ丸式土器期の散礫群及び集石遺構7基や炉穴32基、アカホヤ火山灰降灰以降では、土坑3基や中世の掘立柱建物跡18棟の確認など多くの成果を得た。

また、迫内遺跡については、平成10年4月9日から調査を再開し、平成11年3月末の終了を目指して約4,400㎡を現在調査中である。本年度は、昨年確認されていた石塔群など丘陵地の調査と建物撤去の進捗に合わせて平地部分の調査を実施した。調査の結果、丘陵部分で古墳時代後期の横穴墓2基とその墳丘1基及び前期と考えられる地山成形の小古墳2基を確認した。また、中世の石塔群は、残存状況はよくなかったものの、地輪を中心に45基の五輪塔と13基の板碑を確認した。このほか、基壇状の土台を設け雨落溝をめぐらせた掘立柱建物跡あるいは礎石建物跡と考えられる遺構を新たに確認する等地域の歴史を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。

本年度新規に発掘調査を開始した大辻屋敷遺跡は、現地の建物の撤去状況に合わせて、平成10年9月16日～11月24日と平成11年2月8日～22日の二次にわたって約700㎡の調査を実施した。一次調査では、古代～中世の遺物包含層から須恵器等の集中箇所が確認されたが、明確な遺構は検出されなかった。この遺物包含層は、この地区に本格的に集落が形成されたと考えられる近世以降現代までの擾乱が著しく、一次調査箇所以外に遺物包含層や遺構が残存していないことを確認して二次調査を終了した。

一方、発掘調査報告書については、遺物整理作業の遅れ等により当初の計画を変更せざるを得ず、年度中に13遺跡分の原稿の完成、平成11年度上半期の刊行を目指している。また、遺物整理作業の方は、整理作業員の未習熟ほか遅れの諸要因はあるものの、徐々にではあるが確実に進めている。

第1表 東九州自動車道関係遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名(旧遺跡名)	所在地	調査期間(平成10年度)	調査進捗等
1	蔵前			
2	矢津彦塚	西都市大字黒生野字野字向	平成10年9月16日～平成11年1月22日	確認調査の結果、調査不要(9年度)
3	小田河原	西都市大字黒生野字大辻遺敷	平成10年9月22日～平成11年1月22日	確認調査の結果、調査不要(8年度)
4	早田追	佐土原町大字上田鳥字平田追ほか		終了(8・9年度)。改称
5・6	別府原・岡ヶ畑	佐土原町大字上田鳥字平田追ほか		終了(8・9年度)。改称
7	上ノ原	西都市大字鹿野田字別府原ほか		終了(8・9年度)。改称
8	下屋敷	佐土原町大字西上郡珂字上ノ原	平成10年4月6日～平成10年6月11日	終了(8・9年度)。改称
9	梅ヶ尾	佐土原町大字西上郡珂字梅ヶ尾		終了(9年度)
10	倉瀬浦	佐土原町大字西上郡珂字待寄浦		確認調査の結果、調査不要(9年度)
11	長瀬原	佐土原町大字西上郡珂字長瀬原		終了(8・9年度)
12	上ノ追	佐土原町大字西上郡珂字上ノ追		終了(8年度)
13	上松尾	國富町大字三名字上松尾		確認調査の結果、調査不要(8年度)
14	松ヶ元	國富町大字木脇字松ヶ元		終了(8・9年度)
15	井手口	國富町大字木脇字井手口ほか		終了(8年度)
16	木ヶ島	國富町大字木脇字上ノ原ほか		終了(8・9年度)
17	塚ノ原	國富町大字塚原字西ノ免ほか		終了(8・9年度)
18	古別府	宮崎市大字金崎字中別府ほか		終了(9年度)
19	倉ノ岡	宮崎市大字金崎字寺原ほか		終了(9年度)
20	新屋敷	宮崎市大字赤原字町屋敷ほか		終了(8・9年度)
21	北ノ内	宮崎市大字赤原字北田ほか		確認調査の結果、調査不要(8年度)
22	島ノ内	宮崎市大字赤原字島内ほか		確認調査の結果、調査不要(8年度)
23	新ヶ森	宮崎市大字吉吉野字新ヶ森	平成10年5月18日～平成11年3月31日(予定)	確認調査の結果、調査不要(8年度)
24	早良村古墳跡	宮崎市大字浮田字田前		確認調査の結果、調査不要(8年度)
25	内宮田・新田	宮崎市大字吉吉野字内宮田ほか		終了(8・9年度)。改称
26	築島塚	宮崎市古城町本城		終了(8・9年度)
27	上ヶ森	清武町大字船引字白ヶ野ほか		終了(7・8年度)
28	上の原 ^{※1}	清武町大字船引字上の原ほか		終了(7年度)
29	磯原 ^{※2}	清武町大字船引字佐ヶ野		終了(7年度)
30	磯原 ^{※A}	清武町大字船引字磯原		終了(7年度)
31	竹ノ内・杉原	清武町大字今泉字竹ノ内ほか		終了(7年度)
32	下屋野	清武町大字今泉字下屋野ほか		終了(7年度)
33	水ノ原	清武町大字今泉字水ノ原		終了(7年度)



第1図 遺跡位置図(1)

- 1 藏向遺跡 2 大辻屋敷遺跡 3 小田河原遺跡
- 4 平田迫(旧 佐土原村古墳周辺)遺跡
- 5・6 別府原・西ヶ迫(旧 山内・桜原・西ヶ迫・黒糞)遺跡
- 7 上ノ原遺跡 8 下屋敷(旧 下屋敷第一・第二)遺跡 9 梅ヶ島遺跡
- 10 待居廻遺跡 11 長藪原遺跡 12 上ノ迫遺跡 13 上松尾遺跡



第2図 遺跡位置図(2)

- | | | | |
|---------------------------|----------|--------------|---------|
| 14 松元遺跡 | 15 井手口遺跡 | 16 木脇遺跡 | 17 塚原遺跡 |
| 18 中別府遺跡 | 19 倉岡遺跡 | 20 町屋敷遺跡 | 21 北田遺跡 |
| 22 迫内(旧 上箇)遺跡 | 23 野添遺跡 | 24 生目村古墳周辺遺跡 | |
| 25 内宮田・柳迫(旧 内宮田・塚田・清田迫)遺跡 | | | |



第3図 遺跡位置図(3)

- | | | |
|-----------|-----------|--------------|
| 26 本城跡 | 27 白ヶ野遺跡 | 28 上の原第一遺跡 |
| 29 権現原B遺跡 | 30 権現原A遺跡 | 31 竹ノ内・杉木原遺跡 |
| 32 下星野遺跡 | 33 永ノ原遺跡 | |

第Ⅱ章 各遺跡の調査

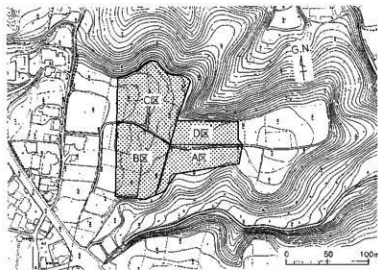
第1節 ^{かみのほる}上ノ原遺跡 (佐土原町大字西上那珂字上ノ原)

1 遺跡の立地

本遺跡は佐土原町の北西部の標高約90mの台地上に立地し、南北に谷、小河川がある。谷間を挟んで南には下屋敷遺跡があり、さらにその東へ約3.5kmの台地上には船野遺跡(昭和45年、別府大学調査)が所在している。

2 調査の概要

調査に当たっては、対象区域を南東部(A区)、南西部(B区)、北西部(C区)、北東部(D区)に四分割し、平成8年度はA区、平成9年度はB区、C区、D区(一部)、平成10年度はD区の調査を行った(第4図)。



第4図 上ノ原遺跡 調査区および周辺地形図

調査地の基本層序は第5図の通りで、I層(表土)からXV層(イワオコシスコリア層)まで確認できたが、調査区全体にわたってゴボウ作付のためのトレンチャーによる攪乱を受けており、場所によってはX層(始良・丹沢火山灰層)まで影響を受けていた。

(1) 後期旧石器時代(VIb~IX層)

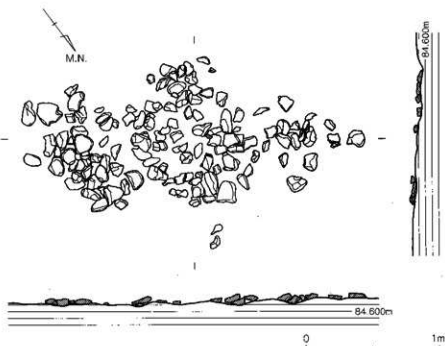
遺構としては、まず、D区IX層において礫群1基を検出した。長径約2.6m×短径約1.1mの楕円形を呈し、構成礫の大半は赤変して割れており、掘り込みはなかった(第6図)。

また、土坑を10基検出し、5基の底面に逆茂木痕と思われる小穴を確認した。うち9基の埋土はVII層が主で、構築時期は小林軽石降灰以降と思われる(第7図、写真2・第8図)。残る1基は、XI層で検出しており、これは、始良・丹沢火山灰降灰以前のものと思われる。

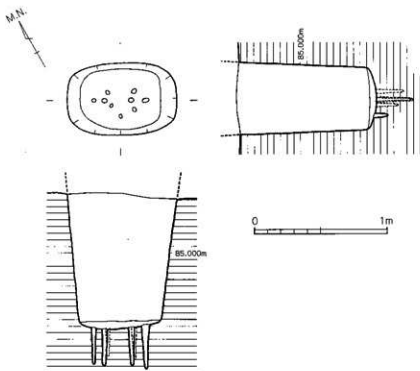
I	表土
II	褐色土
III	黒色土
IVa	アカホヤ二次堆積層
IVb	アカホヤ火山灰層
V	黒色土
VIa	黒褐色土
VIb	褐色土
VII	小林軽石を含む暗褐色土
VIII	暗褐色土
IX	明黄褐色土
X	始良・丹沢火山灰層
XI	黒褐色土
XII	赤褐色土
XIII	アワオコシスコリア層
XIV	明褐色土
XV	イワオコシスコリア層

第5図 基本土層図

遺物は、VI b層からIX層にかけてナイフ形石器、三稜尖頭器、細石刃、剥片等が、XI層でスクレイパー、剥片などが出土した。



第6図 上ノ原遺跡 22号礫群実測図



第7図 上ノ原遺跡 20号土坑実測図

24号土坑

D区東側で検出した土坑で、1.14m×0.86m（底面0.85m×0.63m）、深さ1.07mの楕円形（底面は長方形）の形態をとる。土坑は、VIb層褐色土下部から掘り込まれており、底面に2つの小穴を検出した。

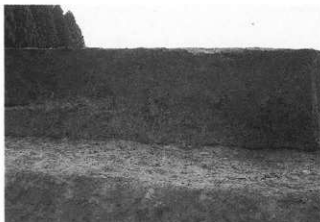
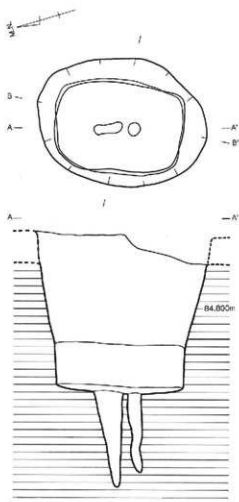


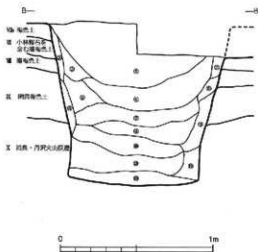
写真2 上ノ原遺跡 24号土坑掘込み検出状況



第8図 上ノ原遺跡 24号土坑実測図および埋土断面状況

埋土層質

- ①赤褐色土 (Hue10YR2/2) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、かなり硬質である。
- ②赤褐色土 (Hue10YR3/2) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、やや硬質である。
- ③黄褐色土 (Hue10YR3/2) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) を多少含み、硬質である。
- ④黄褐色土 (Hue10YR2/3) で、黄褐色砂石 (層2-5sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) を含み、かなり硬質である。
- ⑤赤褐色土 (Hue10YR2/3) で、黄褐色砂石 (層2-5sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) を多少含み、硬質である。
- ⑥赤褐色土 (Hue10YR3/4) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子をわずかに含み、やや硬質で粘りが強い。
- ⑦赤褐色土 (Hue10YR3/2) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、硬質である。
- ⑧赤褐色土 (Hue10YR3/3) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、やや硬質である。
- ⑨赤褐色土 (Hue10YR3/4) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、軟質で粘りが強い。
- ⑩暗褐色土 (Hue10YR4/4) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、軟質で粘りが強い。
- ⑪黄褐色土 (Hue10YR3/4) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) を含み、粘りが強い。
- ⑫黄褐色土 (Hue10YR3/3) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) をわずかに含み、やや軟質で粘りが強い。
- ⑬黄褐色土 (Hue10YR2/3) で、黄褐色砂石 (層2-3sa)、黄緑な白色砂子、黄灰色岩片 (層1sa) を含み、軟化部 (層1-2sa) をわずかに含み、硬質である。



(2) 縄文時代早期 (V～VIa層)

遺構は、D区VIa層において集石遺構7基が集中して検出された。うち5基は約12m×16mに及ぶ礫群の下から検出された。これらは約1～2mの円形を呈し、構成礫は赤変した破砕礫が多く、検出面から約15～40cmの掘り込みを確認した。また、6基で敷石と思われる礫を確認した(第9図)。7基とも炭化物を有し、うち5基で、貝殻条痕施文の前平式系の土器片、楕円押型文土器片、桑ノ丸式土器片、無文土器片などが出土した。

また、炉穴32基(うち炉穴群3群)を検出した(写真3)。埋土はVI層、VII層が主で、埋土中から貝殻条痕施文の前平式系の土器片、貝殻刺突文土器片、無文土器片、穿孔を有する石製品、焼礫、自然礫などが出土した。この他、底面と埋土中に焼土や炭化物を確認した。

さらに、土坑2基を谷筋に下る傾斜面のVIb層で検出した。埋土はVI層、VII層が主で、埋土中から貝殻条痕施文の前平式系の土器片、無文土器片、自然礫などが出土した。

遺物は、V層下層からVIa層にかけて、貝殻条痕施文の前平式系の土器片、貝殻刺突文土器片、山形押型文土器片、楕円押型文土器片、桑ノ丸式土器片、無文土器片などが出土した。また、打製石鎌、石錘、敲石、二次加工剥片、使用痕剥片、剥片などが出土した。

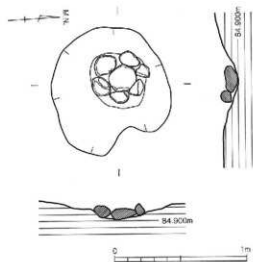


写真3 上ノ原遺跡 7号炉穴群検出状況

第9図 上ノ原遺跡 35号集石遺構配石状況実測図

(3) 縄文時代前期以降 (II～IVa層)

D区ではXI層面で土坑3基を検出した。いずれも、かなり削平を受けているが、構築時期は、埋土状況よりアカホヤ火山灰降灰以降と思われる。

C～D区においては、掘立柱建物跡を18棟確認し、埋土中から銅銭、土師器皿(糸切り底)などが出土した。時期は、遺物から、中世以降と思われる。

以上が平成10年度の調査の概要である。

全調査区を通しては、後期旧石器時代(始良・丹沢火山灰降灰以前)から平安時代までの遺物が出土し、また、後期旧石器時代(始良・丹沢火山灰降灰以前)から近世と思われる遺構を検出した。

第2節 おおつじやしき 大辻屋敷遺跡 (西都市大字黒生野字大辻屋敷)

1 遺跡の立地

本遺跡は、佐土原町に隣接する西都市の南部に所在し、標高約7mにある。一ツ瀬川下流右岸と一ツ瀬川の支流である三財川に挟まれた中州状を呈している。調査地周辺は現在、自然堤防の後背湿地に水田があり、微高地に住宅が点在している。この微高地に屋敷地名(大辻屋敷・堀内屋敷・高屋敷・高園屋敷・大黒屋敷・花下屋敷)として多くの字名が残っている。



写真4 大辻屋敷遺跡 調査区全景

2 調査の概要

調査区南西側の約30%ほどは家屋取去の際、基礎部分を土中に埋めるなどしているため、遺物包含層まで攪乱を受けていた。調査地の基本層序は右図の通りで、第II層の暗褐色土が約15cmあり第III層の黒褐色土が約10cmある。遺物包含層の第IV a層は約40~50cmほどあり、中位、下位と第IV b層の上面にかけて古代から中世の遺物が出土した。第V層は約50cm以上の砂質の層である。

主な遺構としては、溝状遺構を2条、時期及び性格不明の方形の遺構を1基と、東西にのび、深さが約3cm程の畝状遺構を検出した。これらの遺構は、いずれも第IV a層上面より検出

したが、方形の遺構と畝状遺構では遺物が確認されなかった。また溝状遺構では、わずかの焼土と遺物を確認した。第IV a層から第IV b層にかけて焼土が3カ所確認され、焼土中には炭化物粒もいくつか見られ、フィゴの羽口と思われる遺物が出土した。また、第IV b層で柱穴列の下部にあたる遺構を検出したが、掘立柱建物跡としての復元はできなかった。

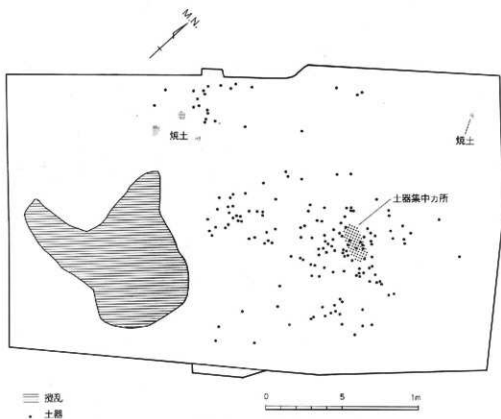
主な遺物としては、IV a層上面では土師器片の集中カ所を確認したが、表面は磨耗・風化が著しい。調査区の中央部では第IV a層から第IV b層にかけて土師器片・須恵器片が散見された。また、第IV a層下位から第IV b層上位にかけて長軸3.2m、短軸1.7mに須恵器片約170点、土師器片約10点の土器集中カ所(第12図)を確認した。この土器の集中カ所での堀込み等は検出されなかった。

I	表土
II	暗褐色土 (やや粘質で硬い)
III	黒褐色土 (やや粘質で硬い)
IV	a 明褐色土 (やや粘質)
	b 明褐色土 (やや粘質で柔らかい)
V	黄褐色土 (砂質でやや粘質)

第10図 基本土層図

土師器については、古代の甕や坏・布痕土器がみられた。須恵器については、中世の大甕が出土した。

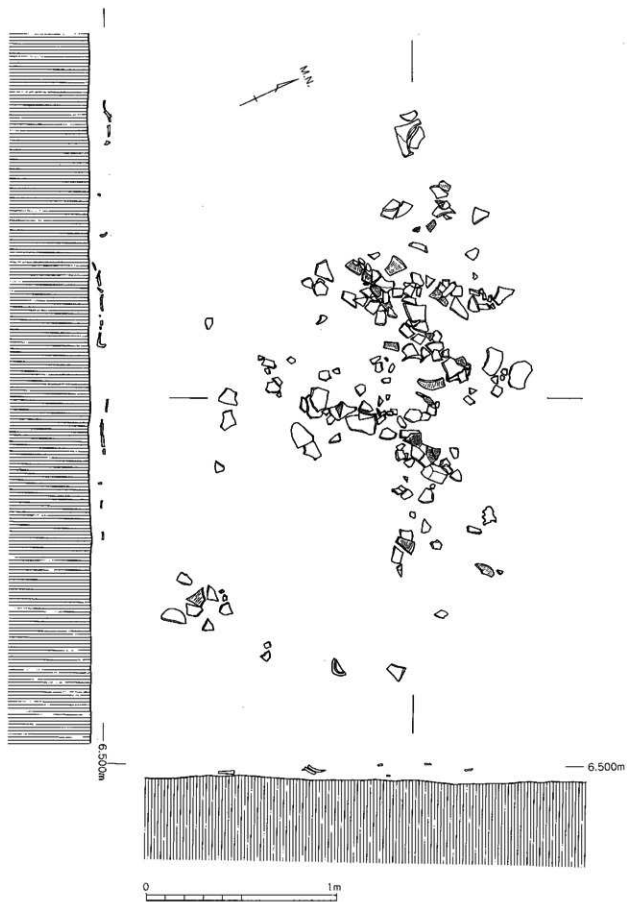
今後は、焼土とフィゴの関係や土器集中カ所の性格等、土器の接合関係を考慮しながら、古代から中世にかけての本遺跡の性格を検討していきたい。



第11図 大辻屋敷遺跡 出土遺物分布図 (1/250)



写真5 大辻屋敷遺跡 土器出土状況 (西から)



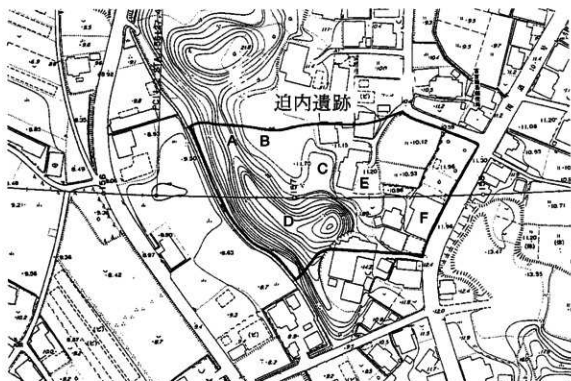
第12図 大辻屋敷遺跡 土器出土状況実測図 (1/20)

第3節 ^{さこうち} 迫内遺跡 (宮崎市大字富吉字迫内)

1 遺跡の立地

本遺跡は、宮崎市富吉地区を通る旧国道10号線と、大淀川の右岸に隣接する市道富吉小松線に挟まれた住宅地に位置する。遺跡の北側は大淀川に面した低丘陵部にのびており、この丘陵からは狭い谷が南側へと広がり、迫田や人家が点在している。遺跡の北方、大淀川を挟んだ地点に町屋敷遺跡が、東の水田地帯に友尻遺跡等が位置し、古代の水田跡が検出されている。

調査を進めるにあたって、北側の丘陵部の東端をA区、その南側の平坦部をB区、中央の微高地をC区、北側から西側の丘陵部をD区、その南側の平坦部をE区、F区とした。A区・B区の調査は平成9年度から継続して行い、平成10年度に新たにC区～F区を調査した(第13図)。



第13図 迫内遺跡 調査区および周辺地形図 (S=1/2,000) ※左方が北

2 調査の概要

(1) A区

A区は本遺跡の北東端に位置する。東西の丘陵地に挟まれた窪地にL字状のテラスを設け、五輪塔群が営まれていた。このテラス部分は東端、南端を造成することにより拡張し、墓域を広げた状況が伺える。五輪塔は地輪を中心に45基検出した。3基を単位とするものを7、2基を単位とするものを8、単独と考えられるものを8検出した。

五輪塔はL字状の窪地の中央を境に、東西に板碑を伴う大型の地輪3基がそれぞれ配置されていた。

この2カ所で墓地在営まれていたと考えられる。この2カ所の大型の地輪の周囲には、それぞれ地輪と水輪を伴う1基あるいは2基を単位とする小型の五輪塔が配置されていた。また、東側の板碑は7本、西側の板碑は5本を根本から折れた状態で検出した。このうち東側板碑については2本の板碑の上部が残っていたが、残りの5本の板碑の上部は検出できなかった。

出土遺物としては、土師質小皿（糸切り底）多数、西側の大型地輪の下から古瀬戸の瓶子1点と石組み（河原石で周りを囲み、さらに河原石を敷いた物）の骨蔵施設1基、凝灰岩製の骨蔵器が出土した。また、この地輪のすぐ東側に隣接する小型の地輪下から鉄製の茶釜を転用した骨蔵器が1点出土している。

この墓地の造営時期については、板碑や五輪塔に紀年銘等がないことから正確な年代は明らかにできず出土遺物などを検討中であるが、鎌倉末期から室町時代にはすでに墓地在形成され営まれていたと思われる。

その他の遺構としては、造成面を彫り込み河原石を詰め込んだ土坑1基を検出した。この土坑のすぐ東側では銅鏡1枚が出土している。銅鏡は、河原石を敷いた上に背面を上にして置かれ、周囲を河原石で囲った形で埋納されていた。この鏡埋納遺構と土坑との関係は今後検討する必要がある。

五輪塔群に関係する遺構として「墓道」の存在についても調査開始時から検討しているが、墓道と認められる遺構は検出されなかった。



写真6 迫内遺跡 A区全景（東から）



写真7 迫内遺跡 A区 骨蔵器出土状況



写真8 迫内遺跡 A区 出土した板碑

(2) B区

B区は、A区の南側の平坦部に位置する。昨年度の調査において、東端で自然堆積の黒色土層上に地山層の礫が広がっている箇所が確認された。本年度はその箇所を中心に調査を行った。土層を観察すると、礫層の中に土師器の小皿の破片が混ざっている状態であった。土層断面の観察より土壇などを造成したと考えられる。表面精査の結果では、遺構がよくつかめなかったので掘り下げを行ったところ、雨落ち溝と思われる溝を検出した。また、溝で囲まれた区域内から、柱穴と思われるピットを検出した。ピットは浅いものと深いものの2種類あり、埋土は褐色層に礫混じりであった。浅いピットには、一部根石と思われる石が検出され、礎石があった可能性がある。現在、少なくとも礎石の建物と掘立柱の建物があったものと考えているが、建物の規模や向き、建て替えの回数などについては検討中である。A区で石塔群が検出されていることから、石塔群に関連するお堂などの建物ではないかと考えている。

また、昨年度に検出した線刻板碑は磨崖板碑と呼ばれる岩盤に板碑を彫ったもので、形がほとんど線刻に近くなったものである。岩盤を成形し、龕壇を削り出し、7本の板碑を彫っている。板碑の形状は、三角形の頭部、その下に二条線を刻み、額とよばれる部分が突出している九州独特の形であり、七本塔婆とよばれる初七日から四十九日までの供養のためのものと考えられる。なお、風化が激しく、年号や造立者などの墨書銘などは確認できない。その下の横穴状の遺構は、磨崖板碑に関連する施設と考えられ、その前面から河原石や石塔の一部が検出された。現在、その性格については、類例の有無や遺跡の性格などを含めて検討中である。



写真9 迫内遺跡 B区 建物跡透景(北から)



写真10 迫内遺跡 B区 磨崖板碑(南から)

(3) C区

C区は、ほぼ中央部に位置する小丘陵である。以前は畑であったが、調査に入る時には、竹林であった。竹の伐採後、表土はぎを行い、縦横にトレンチを入れ遺構の確認を行ったが、遺構は検出できなかった。表土下の層から須恵器の破片が出土したが、同じ層から近世・近代の陶器類や瓦などの破片が出土した。このことから、西側の丘陵部からの流れ込みと考えられ、遺物の取り上げを行い調査を終了した。

(4) D区

D区は北側の丘陵部と西側の丘陵部から成り、北側の丘陵部をD-1、西側の丘陵部をD-2と便宜上区分する。D区は竹山であったが、竹木の伐採撤去を行い、頂上付近にトレンチを入れた。

D-1ではほぼ尾根の中央部から黒色の溝を検出した。また頂上の東側で土師器の高坏の脚部の破片が出土した。表土剥ぎをおこなったところ、尾根を溝で区切った2基の古墳であることが分かった。溝は東側と中央、西側にそれぞれ1本検出した。溝の埋土を除去したところ、東側の溝と西側の溝から土師器などが出土した。時期的には4～5世紀のものと考えられる。

D-2では、頂上は削平されており、トレンチを入れたところすぐに地山層の風化した層になった。しかし、西側で溝状のにじみを検出し、溝にトレンチを入れたところ須恵器片が出土したため周溝と考えられる。また、西側の端で6世紀後半代の完形の須恵器の坏蓋が出土し、墓前祭などが行われていたと考えられる。現在、表土剥ぎをおこなっている。

またD-2の東斜面で、横穴墓を2基検出した。2基ともほぼ同じレベルの高さにある。1基は、開口しており改変されている(以下1号横穴墓とする)。もう1基は、未開口であった(以下2号横穴墓とする)。



写真11 迫内遺跡 D-1区 溝内遺物出土状況



写真12 迫内遺跡 D-2区 遺物出土状況

1号横穴墓は、防空壕や倉庫として利用された経緯があり内部は空間拡張のため拡張され、床面は構築時より掘り下げられている可能性がある。開口していたため、遺物は残存していない。羨門部分に2段の飾り縁と考えられるものがあり、天井部分では一部ドーム状天井に工具痕が残存している。

2号横穴墓は、東方向に開口し前庭部で標高約14mを計る。本横穴墓は、1号横穴墓周辺の岩盤(宮崎層群)を露出させ、他の横穴の存在を確認していたところ、崖面にわずかにくぼんだ箇所がみられたのでトレンチを入れた結果、確認された。閉塞は、拳大から人頭大の岩片や河原石を積み上げた石閉塞であり、上部は完全にはふさがれておらず土砂が覆いかぶさっていた。玄室内には入り口部分に羨門から流入した黒色の土砂、奥壁側から玄門にかけては崩壊した壁面、天井の岩盤片、あるいはその間に流れ出した泥状の土が堆積していた。羨道は、左側壁側で96cm、右側で84cm、高さ100cmを計る。玄室は、長さ2.85m、奥壁幅約2.5mで、妻入りで隅丸方形に近い平面プランを呈する。天井は寄せ棟で、幅約2cmの軒線が側壁から奥壁へ巡る。床面には幅7~18cm、深さ10cmを計る排水溝が中央部と周囲の壁に沿って設けられている。中央の溝は、羨門中央部を経て、前庭部まで延びている。床面は、奥壁に向かって約3.5度の傾斜があり、扁平な河原石を敷き詰め礎床としている。礎は、溝上部に蓋をする形で敷設された痕跡が一部確認され、その間を埋めて並べられたと考えられる。奥壁側には、人頭大よりやや大きい長楕円の石が使用されている。遺物の出土状態は、玄室内で須恵器、土師器、鉄鏃、不明鉄製品、耳環・玉などの装身具が出土している。

遺物は、左袖側に鉄製品が最も多いものの、前述のとおり流入土砂により破片となっており、完形品についても原位置とするには困難な状態である。右側壁中央床面に、岩盤を掘り残している部分があり、須恵器坏壺3個、土師器坏2個が置かれていた。須恵器については現在のところTK43から準上りIまでの時期幅が考えられる。

横穴墓と直上の1号墳との関連については現在検討中であるが、墳丘の周溝内外からTK43時期の須恵器が確認されていること、墳丘上に主体部が検出されなかったことなどから、ある時期の内部主体であった可能性が考えられる。



写真13 迫内遺跡 1号横穴墓（東から）



写真14 迫内遺跡 2号横穴墓（東から）

(5) E区

C区の南側の平坦地に位置する。住宅地であったが、取り壊し後、トレンチを入れたところ、ピットを検出した。表土剥ぎをおこなった後、ピット群を検出したが、埋土中からは小型の土師器の皿1点と「寛永通宝」が1点出土した。現在、ピットの性格などについて検討している。江戸時代に寺があったとの伝承があり寺跡の可能性もある。南端では、岩盤を加工して井戸枠を造りだしており、排水用と思われる溝を掘っている。十数年前まで井戸として使用していたということである。

(6) F区

旧10号線側に位置する。トレンチを入れたところ、土師器の皿が7枚置いた状態で出土し、なんらかの祭祀状の遺構に伴うものと考えられるが、土坑などの遺構は確認できなかった。近くで近世の墓石がまとめて置かれた状態で検出され、そのなかに「通林神社」と彫られたものがあることから神社などの施設が存在しそれに関連したものの可能性がある。また、ピットを検出したが、遺物が伴わず時期は不明である。ほかに古墳時代の甕が出土している。

平成10年度

東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ

平成11年3月31日

編集 宮崎県埋蔵文化財センター
発行

〒880-0053 宮崎市神宮2丁目4番4号

印刷 株式会社 田中写真印刷
